

## 学区の歴史を教材に

神奈川県 公立中学校教諭

### 1 歴史的分野の難しさ

社会科の中で、生徒が意欲的に取り組む授業や単元を組むことは、歴史的分野においてはたいへんである。他の分野よりも難しい一面があると思っている。

生徒にとって歴史とは遠い昔に、どこか遠くの場所で起こった出来事であるように感じられているからではないだろうか。教材が生徒に切実な問題を与えない。授業方法が歴史とは関係がないなど、授業にどこか空々しさを感じさせるということがあるのではないだろうか。

たとえば、よくある実践で「歴史新聞」というものがある。素晴らしい実践もあり、歴史新聞が良くないということではないが、なかには、新聞の体裁やレイアウトは素晴らしいが、書かれていることは資料集の丸写しというものがある。生徒の中に歴史についての興味や関心が湧いているのだろうか。

現在の生徒にとって歴史的分野の授業に現実性や問題性が乏しくなるため、このようなことが起こるのだろう。

### 2 学区の教材化

そのような難しさを乗り越えるには学区の歴史を教材にしていくことが一つの解決になると思われる。生徒の実際住んでいる場所を教材にしていくことによって、授業に切実な問題性と追体験的な現実性を与え、生徒の活動を生き生きとしたものにするのではないだろうか。では、どのように学区の歴史を教材化していくか。

### 3 2枚の錦絵から

私の学区には幸いなことに、東海道が通っており、旧東海道53の宿場のうち、神奈川宿と保土ヶ谷宿がある。2つの宿場は錦絵の東海道五十三次の中で描かれている。地域の具体性を含みながら、日本の歴史に深く関わる事柄として、東海道五十三次の錦絵と古地図を教材として利用することから単元を始めることを計画した。

## 4 江戸時代の岡野ってこんなだったの？

まず1時間目は「江戸時代の学区の様子を錦絵から知ることによって生徒に驚きを与える！」という目標で行った。

### 授業の流れ【1時間目】

1. 江戸時代の西区の様子を絵で描いてみよう  
(20分間)
2. 江戸時代の西区の様子を描いた錦絵を見て、疑問を見つけだそう (30分間)

江戸時代は今からどれくらい前か、一斉授業で確認する。その後、何も見ないで生徒の既存の知識だけで、江戸時代の様子を描かせる。10分程度で簡単にまとめさせて、生徒のレディネスを測るとともに、東海道五十三次を見ることへの動機づけとする。

10分程度で切り上げて、「実は江戸時代のこの地域のようなすが分かるものがあるんです。何だと思いませんか」と発問。「写真?」「絵?」など生徒はぶつぶつ答える。そこで錦絵を見せる。そして、その錦絵が学区のどこかを説明する。生徒は驚きを隠せない。また錦絵についての説明も加える。

「その錦絵をじっくり見て、調べたい疑問を出そう!」とノートに調べたい疑問を書き出すことを指示。

すると以下のようにおもしろい質問がたくさん出た。

### 生徒が出した疑問 (一部)

- ・海に船がたくさんあって、みんな帆が白いのか
- ・船は何を運んでいたのか
- ・道を歩いていた人は商売をしているのか
- ・人が背負っていた箱はなぜ四角、何が入っているのか
- ・絵の道沿いに木(松)が並んでいるのはなぜ
- ・旅人が多いのはなぜか。なんでみんな笠(ぼうし)をかぶっているのか

- ・東海道に大名行列は通ったのか
- ・宿場町って何
- ・移動するときにはどのような手段があったのか
- ・東海道はどれくらいで歩ききったのか
- ・岡野は昔海だったようだ。この辺はみんな海だったのか
- ・この絵を今と比べたらすごい発展した
- ・今よりも海が近くに迫っているのはなぜか?

## 5 ねらい通り!

ゴシックの質問は教師が密かにねらっていた質問である。実は、生徒から必ず出ると予想し、今後の単元の展開を考えていたのである。

### 授業の流れ【2時間目】

1. 「岡野は昔海だったようだ。この辺はみんな海だったのか」をみんなで考えてみよう  
(20分間)
2. あたらしい疑問について (20分間)
3. 次回の授業について

つぎの2時間目は「岡野は昔海だったようだ。この辺はみんな海だったのか」ということをみんなで考えてみた。確かに錦絵から見たら生徒たちが感じているように現在よりも海が迫ってきている。そこで、下の古地図を生徒に提示した。

すると生徒たちは「え！ 岡野中って江戸時代は海の中じゃん！」とか「俺の家も海中にあるよ」とか教室中驚きの声

その驚きの中である生徒のつぶやきがある。「ということは・・・いつだれが埋め立てたの？」この質問も実はねらい通り。

## 6 たねあかし

実はこの単元を組むに当たって、以下のような学区の歴史的事実にスポットを当てて単元の核とした。

岡野新田は1833年（天保4年）に岡野良親が幕府の許可を得て、工事に着手し、その子良哉も父の事業をひきついで、完成したものである。

『横浜の歴史』

『横浜の歴史』という横浜市で配られる副教材を読んでいくうちにこの事実を知った。さらにくわしく調べてみると次のようなことが分かった。

「岡野新田」は保土ヶ谷宿帷子町で代々金物屋の岡野良親が、芝生村前面の海（今の岡野町）が遠浅の葦の生える荒地地であったのを「葦の生い茂るに任せて、ここを放置しておくのはもったいない」と新田開発を計画して時の代官中村太夫の許しを得て、工事に着工した。良親は、天保7年11月9日開拓事業3年目の途中、41歳の働き盛りで没し、良親の長子、岡野家十一代勘四郎良哉が父の志を継いで完成した。その後も開拓は続けられ1850年岡野新田が完成、農家数戸が移り住み、製塩業も営まれた。

さて、岡野新田開拓の動機はどのようなのであろうか。横浜市図書館『横浜の新田と埋め立て』ではほぼ次のように述べている。「岡野新田は、小規模な商業資本を蓄積した富農層が開発したものと考

えられる。このような町人請負新田は、商業資本が蓄積した資本を新しい投資先として経営した企業である。領主は、町人資本を利用して、新田を開かせ、これによって年貢の増加を図るとともに、封建制を維持するために、そこに古村の過剰人口や、零細農民を収容して、定着させようとした」とある。

岡野新田開拓の年は、これまた飢饉の続く年であった。ほとんど毎年天候が不順で飢饉が続いたために各地に一揆や打ち壊しが起こっている。浅間町（岡野中の学区）三村家の古文書によると芝生村でも米穀安売り要求の打ち合わせが進められ事前に発覚した事件も記録されている。

この事件があった年には大阪で大塩平八郎の乱が起きている。「救民」の旗を掲げた平八郎は、たちまち英雄になり、騒動の噂はたちまち全国に広がった。天保8年3月に、芝生村へ代官中村八太夫より「大塩平八郎大阪市中にて騒動後逃亡につき人相書ならびに探索」の申し渡しが届いており、事件の大きさをうかがわせる。

岡野家が新田を開拓しようとした動機や、それを続けようとしたのは、このような社会背景もあったものと考えられる。

『ふるさと岡野』（一部省略）

「私たちの学区はいつ、だれが埋め立てたのか。また何で埋め立てたのか」という疑問はとても広い展開を含んだすばらしい学習問題であることが調べていくうちに分かってきたのである。

よって、この単元を組むに当たってこの「私たちの学区はいつ、だれが埋め立てたのか。また何で埋め立てたのか」という疑問に突き当たるようなスリリングな展開を考え、「岡野新田」を教材にすれば良い学習ができるのではないかと考えたのである。

さらに、生徒にとってわかりやすい錦絵といった絵画資料を動機づけにしたのである。

## 現在の岡野中



\*昔学区の村名は芝生（しばう）村でした。本校のグラウンドは緑化され、芝生が植えられています。

## 7 単元の計画

よって単元全体の流れとしては次のようになる。

1. 江戸時代の西区の様子を書いてみる  
個人学習【0.5時間】
2. 江戸時代の西区の様子を知る  
一斉学習【0.5時間】
3. 錦絵から疑問を出そう  
一斉学習【0.5時間】
4. 岡野は昔、海だったか  
一斉学習【0.5時間】
5. 誰がいつ埋め立てたのか  
個人の調べ学習【1時間】
6. なぜ岡野良親は埋め立てたのか  
個人の調べ学習【4時間】
7. 岡野さんはいい人だったのか  
討論【1時間】
8. まとめ  
個人学習【2時間】

ちなみに個人の調べ学習ではコンピューター端末でインターネット検索と副読本を利用した調べ学習を授業中に行った。また休日などを利用して

横浜市立図書館や区の図書館などの利用も積極的に促した。

そして、「なんで岡野良親は埋め立てたのか」という疑問を調べていくことによって、生徒たちは江戸時代のさまざまな歴史的事象に突き当たっていった。「飢饉と改革、身分制社会、百姓の生活、町人と役人、幕藩体制、大塩の乱、打ちこわし、新田開発・・・」

それらをさらに追求していくことによって生徒は生き生きとした「江戸時代」をつかんでいったようだ。まとめではそれらの用語をつなぎ、ウェブマップのように表現させた。

## 8 まとめ

最後に、この「岡野さんはいい人だったのか」ということを取り上げたい。

岡野良親の新田開発の動機などはさらなる研究に期待したいところだが、個人的には岡野良親は飢饉であえぐ貧民を助けるために新田開発をしたと考えている。岡野良哉以後、岡野家は財産をはたいて岡野町の発展に寄与していく。その意味で、岡野良親という人物を生徒たちにも知ってもらい、郷土の誇りとしていってほしいと願っている。

このように学区の教材を開発していけば、教材が歴史を日常体験の場に近づけることができる。生徒にとって歴史とは身近な出来事であり、適切な教材が生徒に切実な問題を投げかけたり、追体験的な現実性を与える生き生きとした授業になるのではないだろうか。そのために教師の側でも学区についての研究や学習を生徒とともに楽しく進めていければよいのではないかと考えている。

\* \* \*